

下久保ダム見学会後感

工事現場の雰囲気をおろそかに見て知っておくという事は、われわれが実社会に出て、大変に役に立つことはいまでもありません。机の上で得る知識と、実際に現場で見たり、あるいは実習という形で自分の身につけたものは、これから土木を志ざして行くわれわれにとって、必要かつ欠くべからざるものだと思います。その意味で今回の見学会は、その一翼を担っていたと思います。また、他校との交流も、大学において、クラス単位での結び付きが薄くなっている現状で、さらに増して、他校との結び付きは遠くなっているように見えます。その中で下久保ダムの見学会は、現場の雰囲気を知らずして、そしてまた、他校との交流の場として、大変有意義なものとなりました。

今回の見学では、ダムを知ることに関わり、そしてまた、関連事業の重大性を知ることにも非常に役立ちました。なぜなら、私の目からすれば、下久保ダムにおいては（これは土木工事全般にわたると思われませんが）特に道路の整備が立ち遅れているように見受けられました。大学における講義で「これは、こう造る。あれは、ああ造る」ということは教えられると思いますが、たとえば下久保ダムのように、ダムを造る際に必要な関連道路の重要性、あるいはそれをどのような位置に、また、どの程度の道路をいつ頃造れば良いかということは教わりません。土木工事に定石は無く、その場、そのときの事情に合致した工法をとるからかも知れませんが、結局、現場に出てから覚えるということになるのかも知れません。しかし、あらかじめ知っておいて決して悪いことではないと思われるのです。

ジブクレーン：大規模な工事では日本で初めてとか。下久保ダムではこれを支保する。トレスルの移設する時期がとてもむずかしいように思えた。早ければコンクリート打込みに時間が掛かる。遅くなると、ジブクレーンの移動、トレスルの移設のために、間が開らくことである。1日のコンクリート打込量約3400m³、町中では見られない量が毎日毎日打込まれている。休まずに打込んで、よくコンクリートが所要の強度を得るものだと

考えたりもする。また、車中で見てきた地質の悪さ（ダム付近にも見られたが）を技術者がどう克服したか、そして、どのような方法がとられたかを知りたかった。私の不勉強もあったし、想像以上に地質が複雑であり、ダムを造るのだから地質条件は良いだろうという観念があったことも手伝って、そのときに質問の用意がなかったので、聞くことができず、大変残念でならない。碎石現場から骨材貯蔵所、そしてパッチャープラントまで、公団の庭先から見ると、1本のベルトコンベアで連なっているように見える。以前、小河内ダムを見たときは無かったように思えた。一つの大工場がダムという製品をつくっているかのようでもあるし、また山で砂から玉石までをつくっているかのようでもある（この場合は、ダムを造っていることは念頭にない）。それにしても、かなりの騒音を予想していったのだけれども、ずいぶん静かであったことは確かであって、大変好ましいことだと思った。町中で鉄打ちをしている工事があるが、この現場では、コンクリート打込みをしているジブクレーンの音、パイプレーションの音、そして碎石場の機械の音だけであった。社会環境がだんだんと整備されて、豊かになれば、人々が強く望むのは快適な生活である。やはり、これからの土木工事はその全般にわたって、規模の大小に関係なく、工事による騒音や振動は可能な限り小さくするのも、技術者の義務だと思います。

（法政大学 中溝敏彦・記）

中央大学の巻

中央大学理工学部土木工学科を紹介する前に、本学の沿革をごく簡単に書くことにする。

中央大学は明治19年に英吉利法律学校として開校されて以来、すでに80余年の歴史を経た。しかし理工学部は、いわゆる新制大学内の工学部として昭和24年に発足、昭和37年4月から理工学部部に拡大されたものであって、きわめて歴史は浅いが、その母体とされたのは昭和19年に設けられた中央工業専門学校であるから、通算すると20余年の年月を経たことになる。発足当時は木造建築の借住いで、実験設備等不十分のために何かと苦労されたと、よく先輩から聞くのである。だが、わ

が大学の学風の質実剛健の精神で今日の基礎を築き上げたことに尊敬の念を感じず。これら先輩の努力の結果、昭和38年に80周年記念事業計画の一環として、後楽園の高台に6階建の近代建築が新築された。そしてこれらは、今後の充実した進歩の土台になることだろうと思われる。

一方、学部をさらに充実させるために、昭和28年4月、大学院に工学研究科(修士課程)が設置され、なかでも土木工学専攻のみが30年度よりさらに博士課程を設け、そして現在多くの学生が高度の理論および応用について研究を進めている。また学科内においても、去年から水工部門と構造部門学科に分かれ、単位数が一段と増え、学生の質的向上がはかられている。そして、この類別が新時代の技術者に対する社会的要請にあった教育方針を示すものと思われるが、今日の大学の問題と関連して検討の余地があるのではないだろうか。

つぎに科内の様子を紹介しよう。

本学の特色でありかつ誇りとするとところは、立派な教授陣と近代の実験設備を持つ大学であることである。その教授陣の平均年齢が若くかつそれぞれの分野の権威者であられることだ。まず水工関係では、水理の林教授、服部助教授、港湾・海岸の首藤助教授、河川測量の春日屋教授、衛生の内藤教授、そして構造関係では、コンクリートの内山教授、西沢助教授、機械化施工(道路)の

故竹下教授、土質の久野教授、炭木講師、応力の竹間助教授、橋梁の岡内助教授等壮々たるメンバーである。また特に水理実験室等われわれの誇る大きな広さと近代機器が設置されている。

講義においては、去年から方針が変わり、1,2年での専門の基礎科目が増えた。また、水工部門においては第二外国語に原則としてフランス語を取るようになった(現在土木科の半数の学生が受講している)こと等、だんだん私大の特色を活しつつある。

一方学生数は1学年180名前後という地方の方には想像もつかない数ではあるが、われわれはこのマスプロ化を認識し、かつ能動的な態度でこれらを受けとめるのである。確かに学生数が多いことのへい害があるかもしれないが、利点もあり、その利点を生かし、個人が主体的に行動するならば問題も自ら解決されよう。新入生歓迎懇談会を上級生と先生方の主催で開き、また、土木セミナーや見学会を有志が集って開くことなど連帯感を培っている。

今年の就職状況を見ても、本学は着実に伸びており、先輩達が実践して来た質実剛健の精神でさらに歩みたいものだ。

大学の壁を越えて、われわれの社会的使命を認識して、相互に手を取りあい、明日の日本の、いや世界の担い手として頑張ろうではないか。(杉岡敏弘・記)

□ 土木学会編集の本を、あなたの書架に!

土木工学ハンドブック

土木学会編

かつて昭和29年に土木学会が3年有余を費し、最高権威者250名の執筆陣を動員し、厳重な審査と集約編集により完成された決定版として多大の好評を博した本書を、今回全面改訂された。特に設計・施工にそのまま役立つ実際の資料と計算例を豊富に収録し、用語は新制学術用語に統一した学徒・技術家・現場関係者必携の便覧。

編集委員長 東大名譽教授 福田武雄

A 5判・合本	2830頁	定価 8,000円
上巻	1580頁	定価 4,500円
下巻	1250頁	定価 4,500円
B 5判・上巻	1580頁	定価 7,000円
下巻	1250頁	定価 7,000円

□土木学会監修・土木工学叢書□

木 構 造 学

東大名譽教授 工博 福田武雄著
B 5判・254頁 定価 500円

道 路 工 学

片平信貴著
B 5判・550頁 定価 1,800円

コ ン ク リ ー ト 橋

北大教授 工博 横道英雄著
B 5判・650頁 定価 2,500円

改 訂 中

機 械 化 土 工

大林組・研究所 工博 種谷 実

鋼 橋 (III)

東大教授 工博 平井 敦著

プレストレストコンクリートの設計および施工

工博 猪股俊司著

■ 技 報 堂

東京都港区赤坂1-3-6 / 振替口座 東京10番 電 582-9572